

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 26 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2013

課題番号：22720152

研究課題名（和文） 中国雲南省白族（ペー族）の白文（ペー文）の分析と解読法の確立

研究課題名（英文） An analysis of the texts of Bai people in Yunnan Province of China, and exploring the way to discern the texts of Bai people.

研究代表者 立石謙次（TATEISHI KENJI）

東海大学 文学部 講師

研究者番号：50553426

研究成果の概要（和文）：

本研究では、中国の少数民族の一つである白族が自民族語を漢字で書き写す表記体系である「白文」の表記体系を解明しようとしたものである。そしてこの問題について、現代白族の間に伝わる民間芸能である「大本曲」テキストをもとに考察し、表記体系の一端を明らかにし、今後の白族研究の問題点を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

This research introduces “*Da Ben Qu*” 大本曲 which is a folk entertainment of the Bai people 白族, an ethnic minority of Yunnan, China, and analyses the text *Da Ben Qu* for exploring their writing method. The folk entertainment of *Da Ben Qu* is performed in Bai language, the Bai people not have their own script. So the script of Bai language in the text *Da Ben Qu* is written in Chinese characters.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2011年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2012年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 総計 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国 雲南省 白族 白文

1. 研究開始当初の背景

現在、白族（ペー族）の人口は約160万弱、中国雲南省の西部、大理白族自治州と中心とした地域に多く居住している。彼らの先祖は歴史上、漢文を用いて文章を残してきた。一方で、大理白族の一部では、特定の漢字を用いて白語を記したり、漢字語彙を書いて、こ

れを白語で読んだりといった方法も用いられてきた。これを白文という。

白文は、漢語と白語との声調の違い、使用される文字に規範がないこと、使用地域の狭さ、利用範囲の狭さからその使用は限られている。その使用される地域を具体的に言えば、

大理州の白族居住地域の中でも、大理市喜洲鎮・洱源县・劍川県においてわずかながら行われているのみである。

このため白文はもともと白族地域の中でもごく限られた地域・職業の間でのみ通用している表記法であった。この表記法の起源は定かではないものの、少なくとも唐代には、その原型がみられる。その後、元・明代になると大理地方の石碑にも、この白文がみられるようになる。そして現在でも多く清末に作られた白文文献が民間に散見できる。その内容の多くは、宗教儀礼書・民間歌謡の歌詞のなどである。ただしこれまでこれら写本の現物が一般の目に触れることはほとんどなかった。

このため白文の実態については、これまでほとんど研究がなされていない。さらに非白語話者がどのように白文を研究するかという研究方法も確立していない。

たしかに近代以降、白文はすでに歴史・宗教研究・民間文学の分野で注目されてきた。ただし、これまでの白文研究では白文の内容を漢語に意識して紹介したものがほとんどである。また白語の民間歌謡を現代白文（ローマ字）と漢訳との対照で紹介した研究もある。しかし、これもあくまでも白語の口承文学の研究であり、白文そのものに注目した研究ではない。

現在に至るまで、その他の白文文献内容の分析、表記法及びその文化的意義についての研究は、いまだ手付かずのままである。また白文は、たとえ白語に通じている白族であっても白文を完全に理解することは難しい。その使用される地域を具体的に言えば、大理州の白族居住地域の中でも、大理市喜洲鎮・洱源县及び劍川県においてわずかながら行われているのみである。

しかも現在、白文を理解できるのは、一部の大理地方で民間歌謡を生業としている民間芸能人や白族の民間宗教の宗教職能者のみである。しかし彼ら自身も都市化による生活スタイルの変化や漢族への同化、後継者不足、高齢化などの諸問題により急速に姿を消しつつある。白文の伝統も彼らとともに失われる危機にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の諸点である。

- ① 中国の少数民族のひとつである白族（ペー族）が残してきた白文（ペー文）文献の内容を分析し、彼らの宗教的世界観・歴史観の一端を明らかにする。
- ② 漢字で書かれた白文にローマ字表記を付し、白語発音で読めるようにし、中国語・日本語訳作成する。

- ③ 白文表記の規則性と特定の使用語彙を解明し、語彙集などの工具書を作成する。

本研究の目的は、単に白族固有の白文文献の具体的な白文資料の内容の一端を日本語及び中国語によって示すと言うことだけではない。ローマ字による白語表記の併記と語彙集を作成し、その解読方法を研究者及び白語話者に示すことによって、今後の白文にかかわる研究・理解の発展につながるものと大いに期待したものである。ひいては、現在急速に失われつつある白語及び白族の伝統の価値を白族自身にも再確認してもらうことを目的とした。

またこれにより、歴史上、白族が漢字を受容しながら、いかにして自民族の言語を保持・表現してきたかということ、白文という具体的例によって示すことになる。このことは、中国の非漢族がどのようにして漢字をはじめとする漢文化を受容・利用してきたという中国西南における漢族と非漢族との関係性の一端を明らかにすることでもある。

3. 研究の方法

- ① インフォーマント（民間の大本曲芸人）が所蔵する大本曲テキストを借り出し、撮影・記録を行う。
- ② インフォーマントに音読してもらったテキスト内容を録音する。
- ④ 資料解読のためのテキスト打ち込み。研究協力者及びインフォーマントの協力を得てテキスト分析・ローマ字表記の作成及び翻訳をおこなった。
- ⑤ 読済みテキスト確定及び語彙集の作成を行った。

4. 研究成果

当初の計画では、すでに出版されている白文資料をもとに調査を実施するつもりであった。しかし調査の過程で、現在でも大理地方白族の間で行われる「大本曲」と呼ばれる民間芸能が行われている事を確認した。このため調査の対象を「大本曲」台本中の白文に定めることにした。大本曲は三弦の伴奏者と歌い手の二人で行われる。中国の説唱（語りもの、唱（うた）いもの）に近い。大本曲で用いられるテキストの量は非常に多い。大本曲の名前の由来は、「大きな本子（テキスト）の曲」である。ひとつのテキストで最低でも2～3時間は歌われる。伝統的には何昼夜もかけて歌われることもあった。現在でも農閑期の娯楽として、そして結婚や新築祝いなどのめでたい席の余興として歌われる。

この大本曲のテキストを調査対象として定めたのは、これらテキストが、内容・量ともに非常に整備されており、白文標記の考察

のためには、条件が整っていたためである。また現在民間において実際に使用されているという点でも、学術的価値が高いと判断したためである。

調査ではインフォーマントより、白文で書かれた「大本曲」テキストを借り出して、撮影した。また「大本曲」テキスト中から大本曲の代表的な演目の一つである『秦香蓮』を例にとり、これを実際にインフォーマントに読み上げてもらい録音した。この画像をもとにワープロで大本の内容を打ち込んでテキスト化し、発音記号を付した。また、作成したテキストを使用し、インフォーマントの協力をもとに白文資料の日本語訳をおこなった。さらにこの音声記号と翻訳を付したテキストをもとに語彙集を作成した。現段階で、研究代表者は『鋼美案』テキスト全体の語彙を分析し、全体として1,021語彙を抽出することができた。

なお現地調査は以下の期間に計5回に分けて行われた。調査地はともに中国雲南省大理州である。

- ・2010年7月26日 - 9月8日
- ・2011年1月24日 - 3月1日
- ・2011年8月5日 - 8月29日
- ・2012年3月1日 - 3月16日
- ・2012年8月13日 - 29日

この期間に発表した研究成果として、2011年9月に「中国雲南省大理白族の「大本曲」の概説と紹介—テキストを中心に—」を『國學院雑誌』112巻9号において発表した。同文において大本曲の概要を紹介するとともに大本曲テキスト読み上げの過程から、白族が用いる漢語の声調規範が同地方漢族の漢語方言とも異なることを指摘した。この声調規範については、これまでの研究でも指摘されることはなかった。しかも、この漢語の声調規範の発見によって、大本曲テキストの整理及びテキストの表記規範の解明に一定の進展をみた。そして白文は、単に間に合わせて漢字を借りて白語を表記しているわけではなく、一定の表記体系を持ち合わせた独自の「表記法」であることを確認した。

また2012年9月には「雲南省大理白族（ペー族）の白文（ペー文）における表記規範の一考察—特に「訓仮名」と「造字」とを中心に—」を『東海大学紀要文学部』第97輯にて発表した。この中では、白文で用いられる文字用法の区分について再検討をおこなった。これにより中国の白文研究で用いられる「音読」・「訓読」という区分が、日本語の「音読み」と「訓読み」の区分とは異なることを再確認した。さらに「音読」は、万葉仮名で

いう「音仮名」と「訓仮名」という概念に区分できることを指摘した。このことは従来の白文研究では指摘されてこなかった。また「訓仮名」の概念の導入によって、「造字」と呼ばれる白文独自の字とみなされる文字群の一部が訓仮名より発展した可能性を示した。これは従来の白文研究では指摘されていない発見であった。

当初の研究計画では、特定のテキストを例にとり、音声記号・翻訳を施し、さらにこれに語彙集を附して発表する予定であった。ただし最終的なチェックの段階で、研究代表者と研究協力者である楊文輝雲南大学副教授との間で、白語（ペー語）の発音体系の捉え方に若干、意見の相違がみられた。このため、作成したテキストの修正が必要となった。正確を期すために、残念ながら、白文資料そのものの成果発表については2012年度以降に見送ることにした。

またこれまでの研究代表者による研究により、大本曲テキストをはじめとする、白文資料の研究については、以下のような課題が明らかになった。現在、大本曲の演目は82本知られている。ただし、芸人が所有する曲本は、それぞれが自分たちの師匠や同業の芸人から書き写し、創作を加えてきたものである。このため同じ演目でも、全く同じ曲本は存在しない。しかもその芸人に後継者がいない場合は、これら曲本はすべて失われることになる。このため、同じ演目でもその内容を比較検討しなければ、一つの演目の全体的内容は把握できない。白文は本来、白語の歌を書き記すためのものである。ところが、大本曲をはじめとする白族の民間芸能は急速に衰えてきている。おそらくこのような民間芸能の消滅は、直ちに白文の消滅につながると考えられる。このため白文についての全面的な分析もさることながら、早急かつ総合的に、白文資料の記録・保護を行う必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 立石謙次、「中国雲南省大理白族の「大本曲」の概説と紹介—テキストを中心に—」、『國學院雑誌』112巻9号、28 - 44頁、2011年、査読有。
- ② 立石謙次、「雲南省大理白族（ペー族）の白文（ペー文）における表記規範の一考察—特に「訓仮名」と「造字」とを中心に—」、『東海大学紀要文学部』第97輯、

21-37 頁、2012 年、査読有。

- ③ 立石謙次、「中国雲南省白族の歴史観」、
『東海史学』第 47 号、1-2 頁、査読無。

〔学会発表〕（計 4 件）

- ① 立石謙次、「雲南大理地方白族の歴史認識
について—梵僧観音伝説を中心に」、中国
民話の会、2010 年 7 月 18 日、於明治大学
和泉校舎。
- ② 立石謙次、「南詔国・大理国の歴史と雲南
白族の歴史観—阿嵯耶観音伝説を中心に—」、第 18 回雲南懇話会、2011 年 4 月 23
日、JICA 研究所国際会議場。
- ③ 立石謙次、「批評：栗原悟『雲南の多様な
世界—歴史・民族・文化』」、研究プロジ
ェクト：東アジア・東南アジア大陸にお
ける文化圏の形成と他文化圏との接触—
タイ文化圏を中心に—、2011 年 10 月 16
日、東京外国語大学 アジア・アフリカ
言語文化研究所。
- ④ 立石謙次、「雲南省大理州白族（ペー族）
の大本曲にみられる中国系宗教の要素に
ついて」、近代中国における民間宗教経巻
資料の学際的研究」2012 年度第 2 回国
内研究集会、2013 年 01 月 14 日、東海大学
文学部 3 号館。

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

立石謙次 (TATEISHI KENJI)
東海大学文学部 講師
研究者番号：50553426

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：